

立山・能登、同期会（第1～3期）報告

3期 西尾 皓史

今夏の、北陸地方の暑さは記録的なもので、雨の降るのを心待ちにしながらも、7、8月は雨に恵まれず、カラッカラ天気のまま9月を迎えることとなりました。

さて、我々、1～3期の同期会を、9月9～11日の3日間、“立山・能登”と、かつて現役時代に活動の拠点となった、思い出の地で開催することになっておりましたので、「7、8月は晴れた日が続いたのだから、このまま9月10日過ぎまで、晴天を持続して欲しい！」と神にも祈る気持でおりました。しかしながら、神に我々の気持が通じなかったのでしょうか、その2、3日前になって沖縄周辺にあった大型の台風14号がゆっくりと北上し始め、一方、秋雨前線が日本列島にビタリと張り付いたような形で停滞することになり、「これは困ったナ。」と、内心、幹事の日頃の行いの悪さを反省しながら、当日を迎えることとなりました。

9日朝の天気予報では、「富山県の今日、明日は曇り、ところによってにわか雨」ということでしたので、天候に恵まれなかったのは幹事の不徳のいたすところと、覚悟を決めて家をあとにしました。

午後1時、予定通り、JR金沢駅西口に、安藤、岩井、北、佐々木、鈴木、村田、西尾の7人が集合し、3台の車に分乗してケーブルカー：立山駅に向かいました。立山駅では、田村、高島の2人が合流し、早速、地元の名士、高島兄の案内で、立山駅近くの立山博物館“まんだら遊苑”を訪れ、地界、天界、陽の道、闇の道に我が身をおいて、五感（見、聴、香、触、空）を最大限に働かせてみる、という体験をしました。

不思議なもので、この“まんだら遊苑”で体験した後は、それまで胃が痛くなるほど心配していた天候の事は全く気にならず、「雨が降ろうが、槍が降ろうが、大した問題ではない。現役時代の仲間が久しぶりに集い、健康で元気である事を確認し合うことがこの同期会の狙いなのだ。」と悟ったような気持ちになりました。

美女平行きのケーブルは、16時40分発の“最終便”に乗り、美女平からは立山高原バスで、天狗平の立山高原ホテルに向かいました。

ガスはかかっておりましたが雨は降らず、時折ガスの切れ間から見える鍬崎山や、遠くにのぞむ薬師岳、更に、眼前に聳える見える大日岳、奥大日岳連山に、久方ぶりに感動を覚えた次第であります。また、高原バスが天狗平駅に着いて我々が下車した時、丁度、剣岳の雄姿をガスの合間から、この目で捉える事が出来たのは大変ラッキーであったと思います。

立山高原ホテルには、一足先に第1期の仙田先輩が到着しており、我々の来るのを首を長くして待っていたとのことですが、ようやく参加予定の全員が集い、1年4ヶ月ぶりの再会を手到手をとって喜び合いました。特に、岩井兄は昨年参加できなかったもので、約40年ぶりの再会となりましたが、“岩井節”に磨きがかかり、田村兄と工業化学科で机を並べた中というだけあって、ご両人の議論の“絡まり合い”は大変興味深いものがありま



鈴 岩 仙 北 田 村 佐 安 高
木 井 田 村 田 々 藤 島
木

【立山高原ホテル前】

した。

夕食を終えた後は、高島兄の図らいで、“スターウオッチング”を計画しておりましたが、星は恥ずかしがって顔を出さず、代わりにスライドによる、“星の鑑賞会”を開き、高い山から見る星の美しさ、すばらしさを充分味わうことが出来ました。

その後、せっかく1年4ヶ月ぶりに顔を合わせたのだから寝るのは惜しい、とばかりに一つの部屋に皆が集まり、40年間の時差をものともせず、年月を行ったり戻ったりしながら、留まるところを知らない議論が続き、睡魔に負けて、一人減り二人減り、ようやく全員が眠りについたのは、10日午前1時頃ではなかったでしょうか。

立山高原ホテルの大浴場は、剣岳が一望できる位置にありますので、翌朝5時30分頃、空の明るくなり始める時間を見計らって、剣岳の雄姿にお目にかかるべく、大浴場へ降りていきましたが、残念ながらガスがかかって、剣岳の雄姿どころか数十メートル先も見えず、本当にガッカリしてしまいました。そのうち、OB仲間も各々同じ気持ちでしたのでしょうか、一人二人と、朝風呂を浴びに大浴場に集まってきたが、待っても待ってもガスは晴れず、お互いに顔と顔を見合すばかりでありました。

朝食後、8時20分、天狗平発の高原バスで室堂平まで行き、そこから、いよいよ雄山(3003M)への登頂に挑戦することになります。

全員から、「登る」と言う快い回答を得て、8時45分出発しました。一の越山荘に到着したのは、最も早い者で9時30分、遅れて着いた者でも9時45分の到着で、ここまでは、全員落伍することなく、顔を揃える事が出来ました。

天候は曇りでガスがかかっていたが、雨には殆ど降られず、風もなく、大変歩きやすい状況であったので、年老いた渡り鳥でも大丈夫だったのだらうと思います。

一の越山荘からは、ホンの一時だけ、ガスが晴れて後立山連邦が一望出来たのは、我々の山登りの苦労に対する神様のご褒美だったのかも知れません。

一の越山荘から、雄山頂上へ登ったのは、10名中5名で、第1～3期のOBの“登頂分岐点”は、この辺りにある、ということになるのでしょうか。

雄山の頂上への一番のりは、教師を辞めてからは、孫のお守と畑仕事が生き甲斐という、佐々木さんでしたが、頂上まで登った者、途中で止めた者、いずれにせよ、全員が、久方ぶりに味わう立山の雰囲気、薄い空気、ガス、そして身体中から吹き出る快い汗に、充分満足する事が出来たと思います。

昼食後、午後1時40分発の高原バスで室堂平を後にし、美女平へ向かいました。



西 高 佐 安 田
尾 島 々 藤 村
木
【室堂平にて】

午後3時、ケーブルカー立山駅で、一旦解散し、引き続き、“能登、オプションルツアー”に参加する、安藤、北、鈴木、田村、西尾の5人は、今日の宿舎である、氷見に向けて出発しました。

オプションルツアーには、新たに、登内、北野、の2名が参加することになっており、



西 安 登 鈴 北
尾 藤 内 木 野
【見附～恋路】

二人を、JR氷見駅でピックアップして、“九殿浜温泉、ひみ”に入りました。

登内、北野の御二人とも、昨年参加しておりますので、1年4ヶ月ぶりの再会でしたが、それでも大変懐かしく、ここでも、再会を心から喜び合い、途切れることなく話に花が咲き、「また一年若返った！」という実感に浸ることができたのは、私だけだったでしょうか。

“九殿浜温泉、ひみ”は、小高い丘の上にあり、眼下に氷見湾が広がり、その向こうに、立山・剣岳の連峯がそびえたって見えるという、非常に風光明媚なところに位置していますが、当日は、残念ながら曇天のため、立山・剣岳の連峯をのぞむことが出来ませんでした。

しかし、外は晴れていなくても、氷見のキトキトなお魚は天候に関係なく、キトキトで美味しい。評判に違わず、久し振りに新鮮で、深みのある味をもった魚を十分堪能する事が出来ましたが、立山へ登った後だったから、尚更美味しかったのかもしれませんが。

夕食後は、体力が衰えたとは言え、舌力は益々盛んな登内兄が加わった事もあり、かつての論客である、元祖鈴木兄、北兄、と口舌泡、とばかりに、政治、宇宙、宗教、哲学、環境問題から、OB会のあり方にまで話しが及び、そこに、奇想天外な発想の出来る田村教祖が口を出すものだから、議論は大沸騰するが、結論が出ないし突りも期待できない。

横にいる、安藤さん、北野さんが、時々、キツイ反撃をすると、それにタジタジとなる場面もあり、大爆笑の中、大変楽しくてアツ～イー時を過ごす事が出来ました。

聞き上手の西尾は、「現役時代もこんな議論をよくしたナ。結論も突りも期待できない議論の方が、罪もないし、犠牲者も出なくてよいのかな！」と一人納得しつつ、疲れの為か、遂、うとうとしながら、聞いている振りをして眠りについた次第です。

翌日、11日は、朝起きて見ると残念ながら、雨模様の天気、部屋から眺める、氷見湾も霞んで見える。勿論、立山・剣岳の連峯は見えないので、「見えぬあたりが、立山・剣、...。」と替え歌を口ずさんでみるが、空しい感じがする。

鈴木兄が、「悪いナ、やはり俺が東京から雨を運んできたんだヨ、幹事のせいではない。」と、しきりに気を使ってくれるので有り難い。

7時30分に朝食をとって、8時出発する事となったが、田村兄が突然、「能登を回らずに、会津若松へ帰らなければならなかった。」と言う。

従って、6名が、2台の車に分乗して出発しました。

雨は止まないし、時々、気が狂ったかと思われるほど、土砂降りになる。でも、登内兄は、「カラリと晴れた能登の海より、雨に霞んだ海の方が、よほど情緒があつてすばらしい。」と、これまた幹事を慰めてくれるので本当に嬉しい。

氷見を出発し、七尾から能登島大橋を渡って能登島の西側を走り、ツインブリッジを渡って中島町へと車を進めていったが、雨はなかなか止んではくれません。

中島町～穴水町を通過して輪島市へ行き、輪島の朝市を訪れたが雨が強く、車の中から眺

めて、匂いをかぐに留めましたが、晴れていればいろいろと買い物が出来たのに！と残念。

それから、白米の千枚田、曾々木海岸を訪れ、昭和34年5月にワンダリングし、テントを張って野営した海岸を眺め、過ぎ去りし年月の如何に大きいかを考えて、つい胸が熱くなるのを覚えたのであります。

狼煙の灯台は、雨のため、次回にまわすことにしてここをパスし、九十九湾へと車を走らせましたが、能登の道路は、40年余り前にワンダリングした時に比べると、想像も出来ないほど立派に整備され、雨の中のドライブとはいえ、それなりに、思い出深い快適なものになったと思います。

見附島（軍艦島）の見えるレストランで昼食をとり、その後、助三郎と鍋乃の悲恋物語を偲ぶ、恋路海岸へ立ち寄ったあと、穴水から“能登有料道路”を経由して、金沢への帰途につきました。

来年は、“冬のスキー合宿”の舞台となった、山の防・平岩周辺で開催することにし、全員が元気な姿で再会することを誓い合って、解散した次第であります。

（参加者名簿）

- ・第1期：仙田厚太郎、
- ・第3期：安藤道子（旧姓、柿谷）、岩井 修、北野倫子（旧姓、加藤）、北 正昭、
佐々木美穂子（旧姓、宇野）、鈴木兵一、高島 誠、田村昭夫、登内郁夫、
西尾皓史、
- ・第7期：「特別参加」村田泰恵（旧姓、木下）

なつかしい古い顔、みんな元気だよ！

昭和43年卒（9期） 鍋島 武

IT時代は怖いですね。東京で、KUWVの顔合わせ会をひっそりとやっていることが、インターネット経由で、KUWV・OB会のお母さまにキャッチされることになりました。それで、何か一筆をとる依頼を受けてしまった次第。ということで斜め読み用の駄文をメモしました。

1. なが〜い付合いのワンダラー

昭和43年春、KUWVを卒業。転勤での出入りはあるものの、常時6、7人が東京周辺に在住。東京に来た頃は、一年先輩のキリンビール社勤務の藤井信晴さんにキリンビアホールでよくご馳走になった。それ以来33年間、毎年一回くらいは43年卒を中心に、顔合わせ会をやっている。酒のつまみに、高度で難解な話は不要ということで気楽な会話に終始。（小屋酒場で飲みながら、大論文をものにする御仁は偉いと思う。何時だったかの数式は私にとって難解だった。理解不能だった。）

会社では、悔しいこと、泣きたいことはたくさんあろうが、この顔合わせ会では、愚痴話は出ない。みんなの元気な顔を見て、また明日からしつかりやらなくちゃと、自分で自分を励まし

ながら帰宅する。

それでも、一年くらいたつと、ついでに会いたくなってしまう。誰かが呼びかけの案内書を出す。そして集まる。という事の繰り返しの KUWV 卒後 33 年の付合いだ。

2. 古い顔を一言で紹介！

そんな彼らも会社ではそれぞれ自分としての最大限の役割を果たし、家庭での子育てもほぼ終盤戦。KUWV・OBに、もうひとつ〇〇会社のOBということで、二つのOB称号を持つ年代となった。これからの33年間（KUWV卒業以後の年月と同じ年限を今後生きるつもり）、何の現役として、どう生きるかを自問している年代だ。この顔合わせ会の常連達の顔を独断と偏見で表現してみましよう。（敬称略、おべっか略、順不同）

◇伊藤博道 農林中金の金融マン。学生時代と全く変わらぬ紳士。頭は真っ白。頭の悪い KUWV の友人の面倒を長年みたせいかも？（私、感謝しています。）

◇伊藤俊成 昔流で言えば、電電公社マン。体型は学生の頃と同じ。髪は白が目立つ。日本 IT を世界一にするための鍵をにぎる通信事業を頼みまっせ。

◇吉田洋二郎、森本千秋 土木・橋梁の専門家。この二人は、「あの橋は俺の設計、このトンネルは俺の設計…」と、自分の仕事が眼に見えるうらやましい方達だ。頭を使っているせいか、おでこは少し広がったかな。

◇清水一 化学の仕事で、60 歳までの生活基盤は確保済み。そして、次の人生の準備を怠りなく挑戦中。高齢化社会では尊敬に値する人物。頑張れ！

◇保田敦 現在、東京に単身赴任中のエンジニア。華麗なスキーは昔のまんま。みんなの「保田、早く北アに別荘造れ！」の声に奮起するかも。乞うご期待。

◇山中重夫 松下マン。数年前に東京に転勤。元のまんまの 100% 関西人。全く変わらぬ好人物の一人。（でも幸之助さんとは別タイプよ）

◇青柳健二 最近よく顔を出してくれるよき銀行マン。先輩達のことを少し心配なのかも。金融業界の荒波を乗りきって頂戴。

◇四十万利之 三菱重工マン。世界の環境を守るため、改善のためのお仕事とか。後輩の顔合わせ会にいつも参加して、後輩の成長を喜んでくれるお兄さん。あの面構えには変化なし。

◇鍋島武 損保マン。情報システム、保険営業、保険業務、ニューヨーク・ヨーロッパ駐在と担当業務はよく変わるが、真剣度合いが足りぬ。その証拠に、体型、髪に変化なし。

◇藤井信晴 顔合わせ会のきっかけのためにビールをご馳走してくれた篤志家。転勤等で 25 年位、お会いできず。2 年前に名古屋から、「20 数年振りに上高地に行った」とのお便りあり。（お会いしたい。今度はビール代払います。）

◇この他にも、吉田圭子さん、北川邦夫さん、上村人史さん、山口裕さん、森川功さん、島崎隆信さん達が元気な顔を見せてくれたことがあります。（私にはボケの初期症状あり。忘れたお方もありそう。ご容赦を！）

3. 白山神社の近所で仕事！

人間の縁・運とは不思議ですね。今年 7 月から私の新職場(会社)は、霊峰白山信仰の白山神社（西暦 948 年、加賀の国一の宮白山神社を祭ったことに始まる。）のご近所だ。かつ加賀百万石の上屋敷跡（東大本郷）の近所でもある。夕方には、ビルの谷間から富士山が見えたりもする。KUWV 卒業生にはぴったりの地だ！ KUWV 一年生、三年生、四年生の三度にわたり、オープン山行のボッカ隊に志願し、霊峰白山に金大の学生さんをたくさんお世話したのを、神はみていたのだ。神からの贈り物かも。

この会社は中堅損保三社で作った損保システムの共同ソフト開発会社。ケチ精神でコスト削減を目標に創設した割勘会社だ。従業員、役員もほとんど出向。私は三社持ち回りの当番社長。2 年後にはバトンタッチで、失業確定済。

2 年後にどなたか雇っていただけませんか。賞罰なし。特技なし。セールスポイントは、今年 11 月 26 日(日)、“新宿・青梅間 43km かけ歩き大会”に完歩をめざす健康指向くらいかな。これでは高齢化社会ではただのゴミかな。

4. KUWV 顔合わせ会は永久に不滅だ！

人のつながりとは不思議なものだ。何の接着剤もないのに何十年もくっついている。くつつくための特別の努力をしているわけでもない。なのに一年に一回くらいは顔をお互いに見たくなる。そんな気持ちにさせてしまう KUWV 集団だ。今後もそうなんだろうな。

名古屋の吉田幸造さんから、「12 月 8 日、東京に出張する。顔合わせ会ひらいてよ」の要請あり。もちろんみんな集まるよ。また、水戸の柴田勝之さんからも次回出席の声が届いている。

長嶋さんは、「巨人軍は永久に不滅だ」と言った。私たちは「KUWV 顔合わせ会は永久に不滅だ」と思う。（不滅の巨人がどうして日本シリーズ第一戦、第二戦落とすの。長嶋さん、松井さん！心配させないで！）

以上

(2000.10.31 記)

1 3 期 同 期 会 報 告

13期 柴田 茂樹

初めてお便りします。ワングルのホームページいつも楽しく拝見しています。奥名氏のご尽力には常々感謝致しております。しかし『OB通信』の13期欄がずーと空白のまま寂しい想いをしています、そこで今回初めてお便りします。

我々13期では、ここ7～8年毎年晩秋に旅行をしています。足腰の弱った我々ではとてもワンデリングは叶わず、もっぱら温泉が主流となっております。

今年は総勢9名が参加、吉田穂積君の幹事で軽井沢に集合、草津温泉に泊まり、白根山を經由して志賀高原で遊び小布施で解散しました。我々13期には酒豪というほどの者はなしで、わずかのお酒でバカを言っは一年一度の楽しい時間を共有している次第です。

参加者は、伊藤純治、岩田実、大島良治、島崎隆信、橋正徹、吉田穂積、吉本良治、柴田茂樹・訓子。記念写真を添付します。10期～16期の皆さんには見覚えの有る顔もあるかと思ひます。

ではまた皆様からの『お便り』を楽しみに、……。

キンクロハジロ



同 期 会 報 告 ？

もと36期 奥出 聡美

こんにちば。もと36期の旧姓・新道です。途中で退部してしまった（だから「もと」36期）私に、何がどうなったのか、舟田さんから原稿依頼を頂きました。舟田さんによると「同期会が開かれていれば、同期会報告を。今はちょうど、披露宴や披露宴の二次会が同期会代りになっているのではと思ひ、お願いすることにしました。」とのことでした。6月にあった、私と33期の奥出さんとの結婚二次会のお話を…、ということのようです。

舟田さんの言葉どおり、特に同期会がなくても、36期近辺では今まさに結婚ラッシュで、約2ヶ月毎、どうかすると1ヶ月毎にワングル36期近辺大集合の機会がやってきます。ここ半年あまりを振り返ってみても、6月に信州で私と奥出さんの二次会があり、7月に名古屋で36期・清水勇一くんの結婚披露パーティーがあり、8月に琵琶湖で36期・石川明弘くん結婚おめでどうバーベキュー大会がありました。すごいですね。こう立て続けだと、なんか焦って結婚して行くようだ…（実際、清水くんは披露宴の会場で「ワングルの同期が結婚を決めていく中で焦ってしまいました」とか言っていました。すごい理由だ。）。加えて、立川くんも朝日くんもパパさんになり、36期はおめでたいニュースだらけです。

舟田さんいわく、結婚ラッシュも終わって、皆で会う機会がなくなった時、同期会をやりはじめた、とのことでした。でも、多分36期に同期会は必要ないのでは、と思ひれます。結婚シーズンが終わっても、36期には一年に2度、追悼山行と蒲原君のお墓参りという、一堂に会する機会があるからです。それを仮に「同期会」とすると、幹事は蒲原君と蒲原君の御両親ということになるのかな。この場を借りてありがとう。

追悼山行については、蒲原君の御両親を始め、いろいろな方の記事が「やまざと」にすでに載っていることと思ひます。そこで、今回はお墓参りについて、しかも、蒲原君を偲ぶおはなしではなくて（蒲原くんごめん）もっぱら「蒲原家における宴会の定番」についてお話ししたいと思います。

私自身は、「毎年恒例の蒲原君のお墓参り」には、3年前から参加しました。参加するのは今年で4回目です。でも、36期で行くお墓参り、は、多分、追悼山行が始まった年から平行して毎年あったのではないのでしょうか。そうすると、もう8回目くらいになるのかな？ このお墓参りは毎年、追悼山行が終わった後、10月か11月頃あります。石川くん、新倉くんなど、誰かがみんなの都合を取りまとめて、日取りを決め、蒲原さん宅に一泊の予定で、みんなで押しかけます。他の人は知らないけれど、私は結構このお墓参りを楽しみにしています。「お墓参りが楽しみ」なんて変ですけど、蒲原君のお墓は交通の便の悪いところ



蒲 櫻 奥 新 竹
原 村 出 倉 林
柴
田 石 金 沢
川 井 田
【お墓参り】

にあつて、車を運転できない私はなかなか一人ではお墓参りに行けないのです（一度電車で行って、本当に大変でした）。だからこの機会を逃すと、今度いつお墓参りにこれるかわからない、という理由から「これはいかねば」と思ってしまう。あとは、やっぱり、なんだか楽しいからかな。

お墓参り当日は、お昼ごろ大垣駅に集合して、車に分乗して蒲原君のお墓に向かいます。お参りをして、蒲原くん久しぶりの挨拶をして、それから近くの芝生がきれいな公園に行つて、敷き物に座つて、蒲原お母さんお手製のお弁当を食べます。そして、最近の傾向では、なぜかスポーツに興じます。一年一年、体力がなくなって動かなくなる人（石川くん、君のことだよ）、なぜか激しくスポーツしてる人、寝ちゃう人、などなどなど。

夕方近くになってから蒲原家へ。夜はお母さんのおいしい手料理（名古屋のごちそうという感じ）を頂いて、飲んで騒いでいろんな話をします。わいわいと夜もふけてくると、お父さんにスイッチが入つて歌い出します。それから近くの銭湯に行つて、だれそれは腹が出てきたなんて言いながら、蒲原家に布団をぎゅうぎゅう敷き詰めて、みんなマグロのように横たわつて寝る…、というのが蒲原家ワングル宴会の定番です。なんだか学生みたいで、いいでしょう。

清水くんの結婚式のように、名古屋でみんなが集まる時や、機会なんてなくても「遊びにおいでよ」と蒲原さんから声がかかれば、こんないつもの楽しい蒲原家の宴会が待っています。蒲原お父さんお母さんに感謝感謝感謝です。もちろん蒲原くんにも。

ちょっと関係ないですが、蒲原お父さんお母さんといえば、この結婚ラッシュシーズン、当人たちの次に忙しいのは、まさに蒲原夫妻ではないでしょうか。二次回出席率ナンバーワンだし（推定）。なにゆえ忙しいかといえば、36期近辺のワングラーが結婚した時、蒲原さんが必ずくれるプレゼントがあるのです。蒲原家に遊びに行った人なら誰でも知っていると思いますが、蒲原新太郎さんは歌がうまい！ギターもうまい！のです。そして、結婚した私たちのために、一曲選んで、門出のお祝として歌ってくださるのです。そして曲の間奏中に、お父さんのギターの調べに乗せて、お母さんが「はなむけの言葉」を朗読してくださるという…、よいでしょう、よいでしょう。日頃、辛口なお言葉を頂いているだけに（？）本当にじーンとしてしまいます。私と奥出さんの時は、蒲原家の居間で、吉田卓郎の「花嫁」を歌っていただきました。じーンとしていると、「なんで泣かないの。（34期の）金田くんの奥さんは涙ぐんどったよ。」とお叱りを受けたけど。清水くんの時は、藤井フミヤの「True love」を、石川くんの時はサザンの「TUNAMI」を歌ってくださり、その時はなぜか（？）我々も一緒に歌いました。

蒲原さん、蒲原君、我々の永年同期会幹事として、今後ともよろしく願いいたします。では、11月にお墓参り、楽しみにしています。

（舟田さんへ：我々の二次会とは全然関係ないことを書いてしまいました。すみません）



沢 清
 櫻田 水金
 立村 井 柴
 蒲川 石田
 新原 川
 道 遠
 藤

【蒲原家の宴会】



藤 福 田 金 新 立 伊 柴
 牧 田 石 中 沢 井 遠 倉 新 川 藤 奥 田 山
 川 田 藤 太 ち 出 本
 郎 子 さん



道 寺 福 清 金
 草 明 島 佐 田 水 吉
 飼 今 佐 川 山
 井 藤 本

若 望 井 新 金 櫻 福
 山 月 村 倉 井 村 田
 石 伊 奥 新 道 沢
 川 藤 出 道 田

【二次会の写真】

ロシア沿海州シホテアリン山脈 オブラチナヤ山 (1854m) 登頂記

7期 村田 泰恵

2000年(平成12年)10月24日(火曜日)

北 陸 中 日 新 聞

北経随想

黒沢明監督による日ソ

共同製作映画「デルス・

ウザール」を二回観賞し

た。百年前のシベリア極

東地区は、ヨーロッパの

人びとにとってはさいは

ての辺境であり、軍人で

探検家のアルセーニエフ

が活動した舞台だ。映画

では探検隊の隊長「カピ

タン」である。その隊長

とデルスの探検、人間愛

を描いた映画に感銘し、

自分自身の肌で、シベリ

ア極東の世界に触れてみ

たいとの欲求が年々高ま

ってきた。

そんな折、仕事でロシ

アに行った時、現地の青

年と知り合った。ロシア

沿海州の観光事業で生活

したいという青年と出会

わなければ、今回の登山

成功はおぼつかなかっ

た。

日本人登山隊一行は建

ナヤ山(雲の山)の意味。

標高一八五四メートルの山ろ

くに着くまで九時間かか

った。この夜はこのペー

スキャンプに泊。森閑と

したやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプ

を出発し、午後一時に頂

上到達。出発からベース

キャンプに戻るまで十四

時間半を要した。このア

ムール地方には現在約四

百五十頭のアムールトラ

がいるといわれる。世界

で一番美しい模様のトラ

だ。そのほかヒグマ、ツ

キノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を

掘り返してえさを取った

の6WD十トトラック

は、ロシア人ガイドら

を含め一行九人を乗せ、カ

ンパというアムールトラ

の足跡は深さ五センチ

もめり込んでいた。

「オブラチナヤ山

よ、ウズリーの流れ、い

り、お世話になったロシ

跡がいくつもみられた。

人頭ほどもある動物のふ

ん。体長二メートル、体重一

百キロというアムールトラ

の足跡は深さ五センチ

もめり込んでいた。

「オブラチナヤ山

よ、ウズリーの流れ、い

り、お世話になったロシ

えつ、ガイドのスコ

プ付き連発銃に守られな

がらの五泊六日の登山行

だった。原生の山を振

り返り、別れを告げ

た。「オブラチナヤ山

を体験できた喜びに浸

り、お世話になったロシ

アの人びとの温かさをし

みじみ思い返している。

ロシア登山のルートが

できたので、来年は三四

〇〇キロクラスのイルク

ツクの山に挑戦したいと

考えている。

(石川県中央病院副

院長、日本山岳会)

カ丸 茂穂氏(り

きまる。しげほ)

一九六七(昭和四十

二)年、金沢大学大

学院医学研究科博士

課程修了。七五年金

沢医科大学助教授、

七九年に石川県立中

央病院放射線科部長

を経て、副院長に。

日本山岳会、アラ

スカ山岳会、県自

然保護協会、白山

診療班員。五六年以

来、白山登山百六十

三回を含め、五百回

以上の登山経験。七

一年、アラスカ北極

圏のブルックス山脈

で三月の登山。金

沢市城南在住。六十

五歳。

新芽が吹出す4月末、R氏よりロシア沿海州

の山に登らないかと声がかかる。

20年間山登りと無縁で過ごし、3年程前より再び山に登り始めたものの、新参者はなかなか仲間に入れて貰えず、かと言って、今更、〇〇山同好会なんぞに入ることも出来ず、一人寂しく安全登山をしていた者が、飛び付くのに数秒も必要としなかった。

総勢5名、男3名、女2名。女1名では不都合ということで、私にお声が掛かったらしい。

でもそんなことは問題ではない。1人では決し

て行くことが出来ない山に登れる。それで十分だ。

目標にオブラチナヤ山が選ばれた理由はシホテアリン山脈で最も高い山、しかも、この山に登った日本人はまだいないだろうということであつたらしい。標高1854m。

詳しい地図が手に入らない。ここからが私の出番だ。理学部地球学科に行けばあるのではと、聞きに行くと、何と、毎年、その近く(100Km程手前)へ研究のため調査に行っている研究室があつたではないか。

標高一八五四メートルの山ろくに着くまで九時間かかった。この夜はこのペースキャンプに泊。森閑としたやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプを出発し、午後一時に頂上到達。出発からベースキャンプに戻るまで十四時間半を要した。このアムール地方には現在約四百五十頭のアムールトラがいるといわれる。世界で一番美しい模様のトラだ。そのほかヒグマ、ツキノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を掘り返してえさを取った

の6WD十トトラックは、ロシア人ガイドらを含め一行九人を乗せ、カンパというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

跡がいくつもみられた。人頭ほどもある動物のふん。体長二メートル、体重一百キロというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

えつ、ガイドのスコプ付き連発銃に守られながらの五泊六日の登山行だった。原生の山を振り返り、別れを告げた。「オブラチナヤ山を体験できた喜びに浸り、お世話になったロシア

アの人びとの温かさをしみじみ思い返している。ロシア登山のルートができたので、来年は三四〇〇キロクラスのイルクツクの山に挑戦したいと考えている。

(石川県中央病院副院長、日本山岳会)

カ丸 茂穂氏(りきまる。しげほ)

一九六七(昭和四十二)年、金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。七五年金沢医科大学助教授、七九年に石川県立中央病院放射線科部長を経て、副院長に。

日本山岳会、アラスカ山岳会、県自然保護協会、白山診療班員。五六年以来、白山登山百六十三回を含め、五百回以上の登山経験。七一年、アラスカ北極圏のブルックス山脈で三月の登山。金沢市城南在住。六十

五歳。

新芽が吹出す4月末、R氏よりロシア沿海州の山に登らないかと声がかかる。

20年間山登りと無縁で過ごし、3年程前より再び山に登り始めたものの、新参者はなかなか仲間に入れて貰えず、かと言って、今更、〇〇山同好会なんぞに入ることも出来ず、一人寂しく安全登山をしていた者が、飛び付くのに数秒も必要としなかった。

総勢5名、男3名、女2名。女1名では不都合ということで、私にお声が掛かったらしい。

でもそんなことは問題ではない。1人では決して行くことが出来ない山に登れる。それで十分だ。

目標にオブラチナヤ山が選ばれた理由はシホテアリン山脈で最も高い山、しかも、この山に登った日本人はまだいないだろうということであつたらしい。標高1854m。

詳しい地図が手に入らない。ここからが私の出番だ。理学部地球学科に行けばあるのではと、聞きに行くと、何と、毎年、その近く(100Km程手前)へ研究のため調査に行っている研究室があつたではないか。

標高一八五四メートルの山ろくに着くまで九時間かかった。この夜はこのペースキャンプに泊。森閑としたやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプを出発し、午後一時に頂上到達。出発からベースキャンプに戻るまで十四時間半を要した。このアムール地方には現在約四百五十頭のアムールトラがいるといわれる。世界で一番美しい模様のトラだ。そのほかヒグマ、ツキノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を掘り返してえさを取った

の6WD十トトラックは、ロシア人ガイドらを含め一行九人を乗せ、カンパというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

跡がいくつもみられた。人頭ほどもある動物のふん。体長二メートル、体重一百キロというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

アの人びとの温かさをしみじみ思い返している。ロシア登山のルートができたので、来年は三四〇〇キロクラスのイルクツクの山に挑戦したいと考えている。

(石川県中央病院副院長、日本山岳会)

カ丸 茂穂氏(りきまる。しげほ)

一九六七(昭和四十二)年、金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。七五年金沢医科大学助教授、七九年に石川県立中央病院放射線科部長を経て、副院長に。

日本山岳会、アラスカ山岳会、県自然保護協会、白山診療班員。五六年以来、白山登山百六十三回を含め、五百回以上の登山経験。七一年、アラスカ北極圏のブルックス山脈で三月の登山。金沢市城南在住。六十

五歳。

新芽が吹出す4月末、R氏よりロシア沿海州の山に登らないかと声がかかる。

20年間山登りと無縁で過ごし、3年程前より再び山に登り始めたものの、新参者はなかなか仲間に入れて貰えず、かと言って、今更、〇〇山同好会なんぞに入ることも出来ず、一人寂しく安全登山をしていた者が、飛び付くのに数秒も必要としなかった。

総勢5名、男3名、女2名。女1名では不都合ということで、私にお声が掛かったらしい。

でもそんなことは問題ではない。1人では決して行くことが出来ない山に登れる。それで十分だ。

目標にオブラチナヤ山が選ばれた理由はシホテアリン山脈で最も高い山、しかも、この山に登った日本人はまだいないだろうということであつたらしい。標高1854m。

詳しい地図が手に入らない。ここからが私の出番だ。理学部地球学科に行けばあるのではと、聞きに行くと、何と、毎年、その近く(100Km程手前)へ研究のため調査に行っている研究室があつたではないか。

標高一八五四メートルの山ろくに着くまで九時間かかった。この夜はこのペースキャンプに泊。森閑としたやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプを出発し、午後一時に頂上到達。出発からベースキャンプに戻るまで十四時間半を要した。このアムール地方には現在約四百五十頭のアムールトラがいるといわれる。世界で一番美しい模様のトラだ。そのほかヒグマ、ツキノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を掘り返してえさを取った

の6WD十トトラックは、ロシア人ガイドらを含め一行九人を乗せ、カンパというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

跡がいくつもみられた。人頭ほどもある動物のふん。体長二メートル、体重一百キロというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

アの人びとの温かさをしみじみ思い返している。ロシア登山のルートができたので、来年は三四〇〇キロクラスのイルクツクの山に挑戦したいと考えている。

(石川県中央病院副院長、日本山岳会)

カ丸 茂穂氏(りきまる。しげほ)

一九六七(昭和四十二)年、金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。七五年金沢医科大学助教授、七九年に石川県立中央病院放射線科部長を経て、副院長に。

日本山岳会、アラスカ山岳会、県自然保護協会、白山診療班員。五六年以来、白山登山百六十三回を含め、五百回以上の登山経験。七一年、アラスカ北極圏のブルックス山脈で三月の登山。金沢市城南在住。六十

五歳。

新芽が吹出す4月末、R氏よりロシア沿海州の山に登らないかと声がかかる。

20年間山登りと無縁で過ごし、3年程前より再び山に登り始めたものの、新参者はなかなか仲間に入れて貰えず、かと言って、今更、〇〇山同好会なんぞに入ることも出来ず、一人寂しく安全登山をしていた者が、飛び付くのに数秒も必要としなかった。

総勢5名、男3名、女2名。女1名では不都合ということで、私にお声が掛かったらしい。

でもそんなことは問題ではない。1人では決して行くことが出来ない山に登れる。それで十分だ。

目標にオブラチナヤ山が選ばれた理由はシホテアリン山脈で最も高い山、しかも、この山に登った日本人はまだいないだろうということであつたらしい。標高1854m。

詳しい地図が手に入らない。ここからが私の出番だ。理学部地球学科に行けばあるのではと、聞きに行くと、何と、毎年、その近く(100Km程手前)へ研究のため調査に行っている研究室があつたではないか。

標高一八五四メートルの山ろくに着くまで九時間かかった。この夜はこのペースキャンプに泊。森閑としたやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプを出発し、午後一時に頂上到達。出発からベースキャンプに戻るまで十四時間半を要した。このアムール地方には現在約四百五十頭のアムールトラがいるといわれる。世界で一番美しい模様のトラだ。そのほかヒグマ、ツキノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を掘り返してえさを取った

の6WD十トトラックは、ロシア人ガイドらを含め一行九人を乗せ、カンパというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

跡がいくつもみられた。人頭ほどもある動物のふん。体長二メートル、体重一百キロというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

アの人びとの温かさをしみじみ思い返している。ロシア登山のルートができたので、来年は三四〇〇キロクラスのイルクツクの山に挑戦したいと考えている。

(石川県中央病院副院長、日本山岳会)

カ丸 茂穂氏(りきまる。しげほ)

一九六七(昭和四十二)年、金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。七五年金沢医科大学助教授、七九年に石川県立中央病院放射線科部長を経て、副院長に。

日本山岳会、アラスカ山岳会、県自然保護協会、白山診療班員。五六年以来、白山登山百六十三回を含め、五百回以上の登山経験。七一年、アラスカ北極圏のブルックス山脈で三月の登山。金沢市城南在住。六十

五歳。

新芽が吹出す4月末、R氏よりロシア沿海州の山に登らないかと声がかかる。

20年間山登りと無縁で過ごし、3年程前より再び山に登り始めたものの、新参者はなかなか仲間に入れて貰えず、かと言って、今更、〇〇山同好会なんぞに入ることも出来ず、一人寂しく安全登山をしていた者が、飛び付くのに数秒も必要としなかった。

総勢5名、男3名、女2名。女1名では不都合ということで、私にお声が掛かったらしい。

でもそんなことは問題ではない。1人では決して行くことが出来ない山に登れる。それで十分だ。

目標にオブラチナヤ山が選ばれた理由はシホテアリン山脈で最も高い山、しかも、この山に登った日本人はまだいないだろうということであつたらしい。標高1854m。

詳しい地図が手に入らない。ここからが私の出番だ。理学部地球学科に行けばあるのではと、聞きに行くと、何と、毎年、その近く(100Km程手前)へ研究のため調査に行っている研究室があつたではないか。

標高一八五四メートルの山ろくに着くまで九時間かかった。この夜はこのペースキャンプに泊。森閑としたやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプを出発し、午後一時に頂上到達。出発からベースキャンプに戻るまで十四時間半を要した。このアムール地方には現在約四百五十頭のアムールトラがいるといわれる。世界で一番美しい模様のトラだ。そのほかヒグマ、ツキノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を掘り返してえさを取った

の6WD十トトラックは、ロシア人ガイドらを含め一行九人を乗せ、カンパというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

跡がいくつもみられた。人頭ほどもある動物のふん。体長二メートル、体重一百キロというアムールトラの足跡は深さ五センチもめり込んでいた。

「オブラチナヤ山よ、ウズリーの流れ、いり、お世話になったロシア

アの人びとの温かさをしみじみ思い返している。ロシア登山のルートができたので、来年は三四〇〇キロクラスのイルクツクの山に挑戦したいと考えている。

(石川県中央病院副院長、日本山岳会)

カ丸 茂穂氏(りきまる。しげほ)

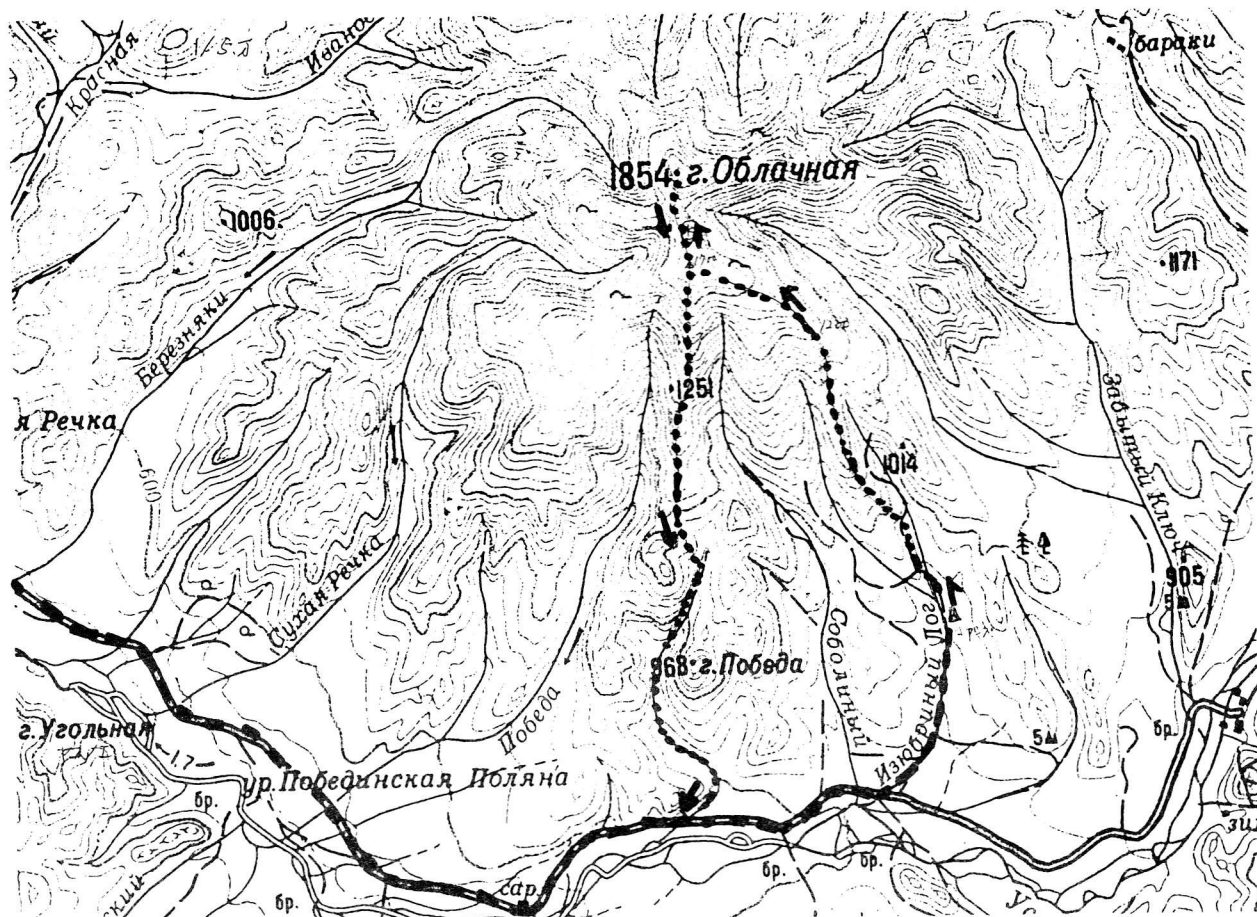
一九六七(昭和四十二)年、金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。七五年金沢医科大学助教授、七九年に石川県立中央病院放射線科部長を経て、副院長に。

1/100万



そのポスは、最も詳しい地図で、アメリカ製の20万分の1の沿海州全体の地図を持っていた。コピーのため、借用を申し出たが断られ、その代わり、オブラチナヤ山近辺のコピーのみ貰うことが出来た。ウラジオストクからオブラ

チナヤ山までのコピーが欲しかったが、とてもそれ以上頼める雰囲気ではなかった。最初は同じ研究の競争相手ではと疑われたが、純粋な登山であることは一応納得して貰えた？ようではあった。



そのボスの話によれば、彼等がその地に行く時は、軍用トラック並の車で、ピストル持参の護衛を連れて行くとのこと。我々が行きたいと思っているところは、戦車でもないで行けないとのこと。又、その辺りは、山賊（強盗）、トラ、熊、マムシ、蚊、ダニが出、特にやっかいなのが、ツツガムシ病のリケッチャーを持ったダニだとのこと。人間の身体に食い込んで、取るのが大変とのこと。暗に、君たちでは無理でしょうと言っているようであった。

この話を聞いて、女1名が、怖気付き、降りてしまった。替わりに男1名が補充された。

この研究室が、その地方を研究対象としているのなら、ひょっとして、学生が関連のホームページでも作成しているのではと、インターネットを開いて、探して見ると、案の定、学生が作成したホームページを見つけることが出来た。そこには、トラの足跡やマムシ、川を渡るトラックなどの写真が写し出されていた。

それらの資料を基に、R氏がウラジオストクの既知の通訳と十数回にわたる電話やファックスのやり取りを行ない、計画は着々と進行して行った。R氏とM氏によって全ての細かい段取りがなされ、R氏よりの計画書が出されること数回、打ち合わせ4回。私の仕事は唯、当日、皆のお荷物にならないような体力をつけておくことだけだった。

オブラチナヤ山登山の1週間前のワングルミレニウム白山登山は、格好のトレーニングの場になることは間違いない。しかし、今年はまだ山らしい山には一度も登っていなかったため、その白山登山でさえ、覚束ない状況であった。

よって、その1週間前、トレーニングに選んだのは、ロープウェイで簡単に登れ、1人でも安全な西穂高岳であった。7月29日、西穂山荘より、ガスの中、独標まで往復し、30日は上高地へ下り、無事トレーニング終了。お陰で、8月5、6日の白山登山も後輩に迷惑を掛けることなく、案にこなすことが出来た。

8月10日、金沢を出発。蚊、ダニ、獣、強盗対策も怠りなく、新潟より飛行機で1時間半でウラジオストクに到着。ロシアもあまり涼しくはなく、ウラジオは湿度が高く、日本の梅雨時のようであった。霧の町と言われるのも頷ける。

11日、我々日本人5人（男4名、女1名、平均年齢57才）は、ロシア人の通訳、その助手、山のガイドと、チャーターしたライフル銃所持の運転手付六輪駆動の軍用トラック（タイヤの直径1m以上、搭載ガソリン1200ℓ、水深1mの水の中も平気で渡れる）でウラジオを後にした。走ること550km、橋の落ちた川



【登頂前夜】

を渡ること20回以上。オブラチナヤ山の麓に着いた時は夜9時。それから、食事の用意をし、眠りに就いたのは12時過ぎだった。

翌12日、朝7時テント場に、護衛の運転手を残し、9人で出発。ロシア人は、殆ど空身、水と食料のみ。日本人は着替えから雨具、カメラ、食料、ツェルトと、かなりの荷物を背負っていた。

上り12km、道無き道を、殆ど休みなし。しかも、私の前にすぐ人がいなくなり、進むべき方角をいつも探さねばならず、倒木を越えるもハイマツ潜ぎをするにも足の長さが足りず、体力の消耗は甚だしく、男との体力の差を痛い程感じる。私の背の荷物が少しずつ軽くなる。そうしなければ、男性について行けない。

かって、大昔、自然の中で暮らしていた時代は、男女の役割分担がはっきりしていた意味を、今回、初めて実感する。しかし、現代社会では、男のみの出番が失われてしまったことも、はっきりと見える。山登りをしている男性は、安心

して。奥さんや子供を連れて、山登りをすれば、お父さんの家庭での地位が上昇すること間違いなしだ。

標高1200mでようやく森林限界に到達、周囲の山並を見渡せることが出来た。山並はどこまでもなだらかで優しく優美だ。

しかし、ここでも5分と休ませてもらえず、山頂を目指す。標高1600m、我々が熊平と名付けた場所には、辺り一面、月の輪熊（ロシアではヒグマより大きいそうだ。体長2m位）の足跡だらけだった。ここにだけ水場があり、体力の限界に達していた私はここで、皆の戻るのを待ちたかったが、熊の出現が危ぶまれ、更に皆と前進せざるを得なかった。

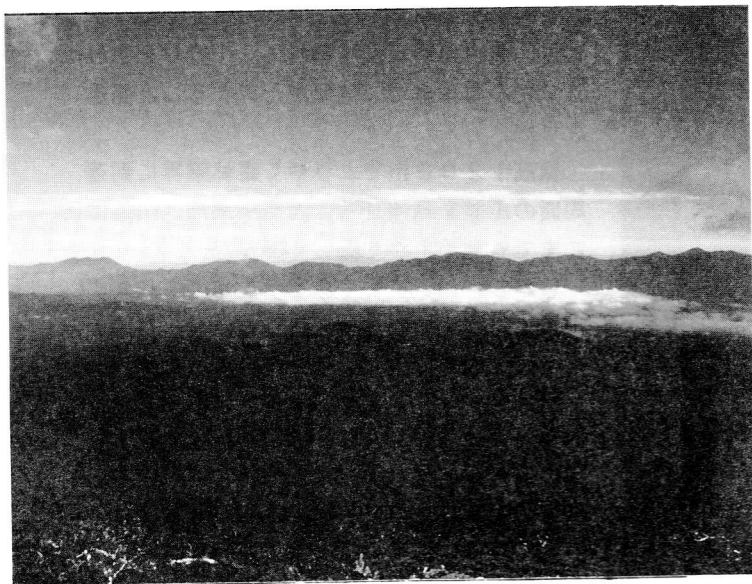
ここからは空身での頂上往復で、疲労困憊していた男性も元気回復し、吾先にと、ガレ場を1854mの頂上目指して歩き始めた。

14時、ガイドと2人になった私は途中でもう歩けなくなり、座り込んでしまう。英語もあまり話せないガイドが一生懸命“five minutes”と言ってくれるのだが、私にはそのまま信じられず、fifty minutesの間違いかも知れないと思い、見えない頂上に向かい「ヤッホー、ヤッホー」と数回呼んでみるも、帰って来る声はなし。これで、やはり、頂上まで5分では行けないと判断。2、30分歩く気力はもう残っておらず、ガイドに、「ここに残る」と宣言。ガイドもとうとう諦めて、私に、決してここから動かないようにと言って頂上に向かった。

待つこと40分で皆が、上から下りて来た。その時は、まだ、下りがあるのだから、無理をしなかったのは正解だったと、自分に言い聞かせていた。しかし、後から、私がギブアップした場所から頂上まで標高差50m、距離にして200mと聞いた時には、正直、頂上に行かなかったことが残念だった。この日、歩いた距離

【朝7時 ダニ、朝露対策も万全、いざ出発】





【1200m地点からの山並】

は30km、その内のたった200m。あの時、上から、「残り、200mだ」と、声を掛け、励ましてくれる仲間がいれば、きっと登れだろうと思うと、…。初めて一緒に登った仲間にそれを求めるのは酷だと分かってはいる。彼等も疲れ、他の人を省みる余裕が残っていなかったのだからと。しかし、…。

15時、下り開始。上りのコースとは別で、尾根二つ離れてる。所々、切れてはいるものの、一応道が付いておりほっとする。車が林道奥まで入れる時は、この道が登山道となるのだ。喜べたのは19時、林道到着まで。ここから、更に12km、死の強行軍が待ち受けていた。これらの林道は恐らく、3～40年前、伐採した材木を運び出す為に作られ、現在は殆ど用がないものと思われた。周囲の山々の木がいづれも若く、大木は見当たらず、ウスリユウ川の本流に、人が渡るために使われていた材木のみは数百年は経ていると思われる大木であった。林道の奥には材木の集積場があるが、2週間程前の台風による、大洪水で、殆どの橋は落ちており、車が入った跡は見当たらなかった。

獣に襲われる危険があるので、明るい内に、森を出なければならない。日没は夜9時、残り時間は2時間、途中、アムール虎の足跡(1週間前のもの)や熊の糞(昨日のもの、米10kg位の量)が数カ所あり、「暗くなったのでマムシに気を付けて」と言われたが、そんなことを考える余裕もなく、皆、唯、黙々と必死で歩いた。

時速6km、向こうにたき火の明かりが見えた時は本当に嬉しかった。そこが、林道の終点。ようやく、広い車道に出たのだ。そこでは、現地の人々がキャンプをしていたが、女、子供もいたので、襲われる心配はないと思い、安心出来た。

しかし、そこから、キャンプサイトまでは、さらに6kmある。皆、限界に来ている。ガイドが通訳の助手を連れて、キャンプサイトまで行き、トラックで迎えに来ることになり、二人は出発して行った。

待つこと、2時間、3時間、トラックの音はしない。聞こえたのはライフル銃の音、一発のみ。満天の星空、満月が段々と高くなり、流れ星が一つ、二つ。何かあったに違いない。しかし、暗やみの森に入っていくことは出来ない。焦る一人は、進もうと言う。しかし、通訳に、ここで待つようにと止められる。先が長くなりそうなので、枯れ木を集め、道端で火を炊く。やはり、火はいい。人を落ち着かせてくれる。

真夜中、0時半過ぎ、遠くで、微かにエンジン音が聞える。ウスリユウ川の本流を渡って、この車道に入っている車は、我々の車以外はほとんどいないはずだ。間違いない。皆の期待に応えるように、トラックの轟音が近づいて来る。トラックが止まり、運転手が下りて来る。お互い、駆け寄り、感謝の気持ちと無事を喜び、手を取合う。トラックに備え付けられたコンテナの中のマットレスに、皆、倒れ込む。今まで寝転んでいた砂利道に比べ、このマットレスの何とソフトで寝心地のいいことか。

迎えが遅れた理由はやはり事故だった。疲れ切ったガイドが途中転倒して、怪我をし、まともに歩けなくなり、遅くなったとのこと。でも、大した怪我にはならなかったと知り、皆ほっとする。キャンプサイトは撤収して来ており、20分程、走った道の脇の空き地で車を止め、キャンプをする。私は立ち上がる元気もなく、ビールに一口、口をつけただけで、何も食わず、横になったまま。流石に男性陣は元気。日本人初登頂のお祝いと、車の外で花火をしている。花



【1500m辺り。バックが頂上】



【初めて持ったライフル銃。ガイドと】

火のお返しに、ライフル銃が5発、ドーンと、すごい音だ。これでは、命中すれば、虎も熊もひとたまりもないだろう。午前1時半、アッという間に、深い眠りの中。

翌13日、目覚めはスッキリ。テントの横に虎とシカの足跡、2週間前のものとか。シカはここで虎の餌食となったのだろう。大体、尻尾まで入ると体長は4mはあるとのこと。最近はかなり数が増えているとのことだ。

ここで、お腹をダニに食い付かれた人が一人。ガイドがダニに油を塗り、私が持参した木綿糸で、ダニの身体を縛り、ゆっくりと引っ張る。ここで大事なのは、食い込んだダニの頭を干切って残さないことだ。数回、糸が外れた後に、するりとダニの身体が人間の肉塊より、抜けて来た。後は、仲間の医者が持参した抗生物質を処方して、一件落着。マダニは家ダニと違い、ツツガムシ病の病原菌を媒介しているため、厄介なのだ。この後、ウラジオのホテルに戻ってから、更に、2名の犠牲者が出る。衣服やザックに付いていたのを、部屋に持ち込んだ結果らしい。

夕方、7時、無事ウラジオストクのホテルに戻る。

翌14日は通訳の案内で、市内を回ったが、車の数が多く、殆ど観光らしい観光は出来なかった。65万人の人口に20万台の車、その9割以上が日本車、それも中古どころか、廃車になった車が多い。車体に描かれた文字はそのまま、洗車などしたこともなく、サイドミラーが取れようが、フロントガラスにヒビが入ろうが、凹もうがお構い無し。信号は少なく、100kmで車が走っていようと、人はゆっくりと横断する。車に跳ねられないコツをここで会得。日

本人は車に跳ねられまいと、走るからいけないのだ。人が車の速度に合わせようとするのではなく、車を人の速度に合わせさせることだ。しかし、ロシアのように道が広くないと無理かも知れない。

町の中を歩いている若い女性のファッションは素晴らしい。カラフルでデザインも様々、田舎に行ってもそうだ。ノーブラ、ヘソ出し、透け透け。男性でなくても、目が点になる。それに比べ、男性のファッションはまるで垢抜けない。背広姿は殆ど見られない。

町には大挙して中国人の観光客が押し掛けているため、我々が歩いている、誰も振り返らない。幸い、危険を感じたこともなかった。日本で思っている以上に安全で、物価も安く、楽しめた。

惜しむらくは時間がなく、慌ただしい旅だったことだ。「今回は、観光でなく、山登りに来たのだから」が、リーダーの口癖であった。

日本人初登頂の人はいいよ。そうでない私はどうなるのと言いたいところだが、二度と出来ない、したくない、冒険旅行であった。

でも、誘われれば、また、懲りずに出掛けることは間違いない。

2000年8月23日記



【トラの足跡（2w前）】